



令和8年 同窓会会報

昭和第一高等学校同窓会編集

発行日 令和8年3月吉日
昭和第一高等学校同窓会

〒113-0033
文京区本郷 1-2-15

TEL 03-3811-0636
FAX 03-3814-7985

令和8年 同窓会総会・懇親会 5月9日(土) 母校講堂 午後1時開始 (12時より受付)



創立百周年
開催をめざして

同窓会会長 秋山 光億

同窓生の皆様には同窓会の運営
に対して、深いご理解とご協力を
賜り、厚く御礼申し上げます。

我が同窓会は令和五年五月、
「創立九十周年」を迎えることが
出来ました。これからは百周年
に向けた新たなスタートを切る
年と言えるでしょう。まさに本
年の干支「午」は、躍動と前進
の象徴。馬のように勢いよく未
来へと駆け出す力を表していま
す。百周年に向かって一步を踏
み出すに相応しい年と思いま
す。

我が同窓会が現在抱えている
改革・改善問題については

(一) 財政の健全化
(二) 会報誌の発行・発送費の
見直し

(三) 幹事会役員の補充・養成
(四) 年間活動の見直し

等かと考えております。

(一)と(二)については、同
時に考えることであります。例
えば会報誌のデジタル化の具体
的な方法等、又、紙面による発
送を希望する会員への対応につ
いては、同窓会維持会費等をお
願いすることも考え、配慮した
運営を行うこととしたいと考
えています。大胆な発想で変革に
挑み、活みなぎる同窓会を共
に創り上げて行きますよう。
これからも会員の皆様のご協
力とご支援並びに、役員の皆
様のお力添え及びご指導を賜
りますよう心からお願い申し
上げます。

最後に会員諸氏のご健勝、同
窓会の益々の発展と母校の更
なるご繁栄を祈念し挨拶とさ
させていただきます。



ご挨拶

理事長 矢島 昇

同窓会の皆さまには、平素より
母校の教育にご理解とご協力を
賜り誠にありがとうございます。
令和七年を振り返りますと国内
外でさまざまなことがありまし
た。一月にアメリカ大統領にト
ランプ氏が就任、世界中がいわゆる
トランプ関税に振り回されまし
た。五月下旬から暑くなり、七・
八・九月上旬まで観測史上最多の
猛暑日が記録され、気候変動・地
球温暖化が心配になりました。八
月下旬、店頭からお米が姿を消
し、米価も急騰、長期的な農業政
策が話題になりました。十月に高
市総理大臣が誕生し、国民からの
高い支持があるものの、日中関係
は厳しい状態が続いています。

世界を見渡せば、戦争や災害と
いった苦難が続く、心を痛める出
来事が後を絶ちません。

そして令和八年、今年の干支は
「午(うま)」です。馬は昔から荷
物を運び、人々の暮らしに寄り添
い、私たちがともに歩んできまし
た。その力強く走る姿は「躍動」
や「活力」の象徴とされ、午年は
物事が勢いよく進み、目標に向か
って一步を踏み出すにふさわしい
年といわれています。

本学園としましては、建学の精
神として校訓を土台に据え、教育
の場である高等学校としての社会
的責任を忘れることなく、着実な
一步を進めてまいります。

同窓会の皆さま、今年度もどう
ぞよろしくお願い申し上げます。



ご挨拶

校長 原 高志

同窓会の皆様には、日頃より学
校教育・学校運営にご理解とご協
力を賜り、感謝いたしております。

昨年度四月七日の入学式では三
七九名の新入生を迎え、全校生徒
九七〇名二六クラス体制でスター
トしました。本年度の入試も順調
に進んでおります。校内では、賑
やかな生徒たちの声が校舎に溢れ
ています。生徒一人一人にとっ
て、この昭和第一高等学校での生
活が実り多いものとなるように願
っています。

これから卒業していく生徒たち
が生きる時代は、産業構造の変
容、多文化共生社会の進展、不安
定な社会情勢など先の予測が困難
な時代となっております。ど
んな試練にも立ち向かえる知恵と
力を身に付けた生徒たちを輩出す
べく、日々の教育活動を実践し
てまいります。

先輩から後輩へ代々引き継がれ
てきた、昭和第一高等学校の建学
の精神「国際人としてのマナー」を
身に付けた、中堅産業人の育成」
そして校訓「明るく、強く、正し
く」のもとに、教職員一同力を合
わせて教育活動に精励していく所
存です。

本校は同窓生との絆の強い学校
です。昭和第一高等学校に入学し
て良かった、卒業して良かったと
思っているように日々努力して
まいります。同窓生の皆さま、今
後もいっそう絆を深め、母校の教
育活動にご理解ご支援を頂ければ
幸いです。

同窓会の益々の発展と同窓生の
皆さまのご活躍とご健勝をご祈念
し、ご挨拶にかえさせていただきます。



尖塔の下に

同窓会副会長 笹木 浩二

校門をくぐるたびに、視線は自
然と上に向かう。大空へ真っ直ぐ
伸びる白亜の尖塔。その姿を何度
見ても驚かされる。しかし私
は、この尖塔をいつもまっすぐ
見上げてきたわけではない。この
学び舎を卒業し、母校から離れ
いた歲月の中で、絆の象徴である
はずの尖塔は、私にとって、母校
との距離を測る標(しるべ)のよ
うな存在となっていた。

不惑の時を過ぎ、教員として戻
ったとき、胸にこみ上げたのは喜
びだけではない。戸惑いもある
った。「自分はここに立つに足る人
間か。後輩に語るべき言葉を持
っているのか」。その問いへの答え
は、今もなお見つからない。
だからこそ、尖塔の下に立ち止ま
り、思うことがある。揺るぎない
自信を宿す、立派な背中を見せる
ことはできなくても、答える姿勢
問いに向き合っても、答えの姿勢
ならびに伝えられる。それこそが
代を照らす一灯となる、私の使命
なのかもしれない。

変わりゆくビル群に囲まれてな
お、凛として佇む白亜の尖塔は、
安易に答えを与えてはくれない。
ただ、目を逸らすことだけは決し
て許さない。その静かな厳しさこ
そが、この学び舎に息づく先達の
情熱であり、尊き伝統なのだと思
う。

同窓生の皆様も、それぞれの場
所で母校との距離を測り続けて
いることだろう。それでも、ふと
あの尖塔を思い出す。その心の機
微こそが、私たちにどこかで繋い
でいる。

今日も私は、尖塔を見上げる。
確信があるわけではない。しか
し、不確かさから目を逸らさず、
問いを持ち続ける覚悟だけは、尖
塔の下に、確かにある。